



第39回 日産 童話と絵本のグランプリ

ネバネバときどきソーナンド

あべ はるこ

ピンポンという音がして、クラスみんなが顔をあげた。授業中のことだ。「せんせー、生協さんが来ちゃった。おかあさんがいないのどうしよう」クラス中に声がひびいた。声の主はもよちゃんだ。今日はオンライン授業の日で、それぞれの家からパソコンで授業を受けているところだった。

シーンとしていた教室に、とつぜん勉強と関係のない発言が聞こえてみんなボカーン。それから、さざ波のようにクラス笑いが広がった。「もよさん、じゃあ生協の方にドアの外に置いていてもいいじゃないね。」担任のふじ木先生が、パソコンの画面越しにいった。

「はい。」もよちゃんは答えて、しばらく画面から消えた。きつと玄関に行っただと思う。

わたしの名前は、まの。クラスメイトのもよちゃんとは、わりとなかよしの方だと思っている。

もよちゃんは、かなりマイペースで

のんびり屋さんだ。やさしくてほんわかしていてもいい。みんなとちよつとちがうけど、もよちゃんといっしょにいると、なんだかいこちのいい感じがする。

もよちゃんがおもしろいのは、たとえば図書室で本を借りるとき。『じゅみょうつてなあに』という本があつて、わたしも借りたかったけど、先に見つけたのはもよちゃんだった。手にとるのがはやかった人に借りる権利があるのだ。

でも、なんとなくその本にあきらめがつかなくて、もよちゃんの様子をちらちらと見ていた。もよちゃんは本を持つてはいるけど、なかなか司書の先生のところに借りに行かない。

借りるのかな。借りないのかな。そわそわと気になつて

「ねえもよちゃん、その本借りる？」と聞いてみた。

すると、もよちゃんは

「借りたいよ。おもしろそうだもん。でも、じゅみょうつてこわいでしょ。だから

ら読めないんだよー。」といった。

えっ。つまり借りるのかな。借りないのかな。

けっきょく、もよちゃんは借りなかったから、わたしが借りちゃった。そして、もよちゃんが

「まのちゃん、わたしの代わりに読んでね」ってわらつていった。

わたしが読んでも仕方なくない？と思いつつ

「うん。」

と返事をした。もよちゃんはやつぱりおもしろいなあと思う。

運動会のかげつこのとき、もよちゃんはずっとに走らない。のんびりと、少しだけ歩く。どんなに時間がかかっても、ゴールまで歩いていくのだ。もよちゃんの「歩くかけつ」を、一年生の運動会ではじめてみたときは、本当にびっくらした。

絶対に走らないもよちゃんは、いつもビリになる。だから体育の授業の練習のときは、もよちゃんのスタートライ

ンだけ、みんなよりだいぶ前にしたり、もよちゃんがスタートして十秒たつてから他の人が走りだしたり、クラスのみんなで、もよちゃんルールを考える。でも、やつぱりもよちゃんはビリになつてしまう。

「もよちゃんがんばれー。急げー。」応援すると、もよちゃんも必死ではやく歩く。その日もビリだったけど、

もよちゃんのタイムは昨日よりはよかつた。もよちゃんだつてがんばっているのだ。

「ねえ、どうしていつも走らないの？」

ゴールしたもよちゃんに、ある日ついに聞いてみた。

すると、もよちゃんは「わたし、保育園のころからいままでずっと歩いてかけつこしてたでしょ。なのに急に走つたらへんだもん。だから走らないの。」と答えた。

「えっ、そういうもん？」

「すごくおどろいた。そういうもん。」

もよちゃんはうなずいた。そんなことを考えてもよちゃんは走つてるんだな。いや、歩いているんだな。

わたしはかけつこが大好きで、運動会のリレーではいつも選手に選ばれた。今年は、ついにあこがれのアンカーになった。

走っているとき、わたしは何も考えていない。ただひたすらはやく走りたい。昨日の自分よりも、だれよりもはやく。聞こえるのは、風の音と、たいこのような自分の胸の音と、みんなの応援だけだ。

だけど、もちろん一位にはなりたいたい。だつて、かけつこなんだから。競争なんだから。

でも、もよちゃんは違うみたい。もよちゃんはいつもわたしの心の中に「そういうもののなの？ そうなんだ？」という疑問をいっぱいかけてくる。そういう考え方もあるんだな、と。もよちゃんはソーナンドのもとなのだ。

去年、わたしは足を骨折してしばらく

く体育の授業に参加できなくなったことがあった。
いつもより歩くのも階段の上り下りも遅くなって、帰り道に気づくと、下校仲間がみんな、いなくなっていた。
みんなに悪気がないのはわかっていて、ただ、わたしがいないことに気づいてもらえないのがさみしい。

そんなとき、もよちゃんだけはいつも校門で待っていてくれた。
「ありがとう。」

という、もよちゃんはきよんとして、につこりして、それからおしゃべりをしながら帰り道を歩き出す。

かわいそう、とか、待っているべき、とか、そんなんじゃないみたい。ただ、わたしといつしよに帰りたいと思っでいる。それがわかって、すごうれしかった。

もよちゃんの気持ちは、ねばやべきでは動かない。自分のしたいことで動いてる。きつとそうなんだ。ならんでゆつくり歩いてくれるもよちゃんの横顔を見ながら、少しわかつた気がした。

くなった。

「もよちゃん。」

大きな声で呼びながら、もうすぐ始まる国語の教室を後ろにして、校庭に飛び出していくもよちゃんを追いかけた。

追いついたらクラスにもどううね。ろう下は走らずに歩こうね。

心の中でもよちゃんに話しかけながら、「もよちゃん、もつとはやく走れ。」

と思っでいた。まぶしい日ざしの中、上ばきで走っでいくもよちゃんの背中を追いかけながら、なぜか楽しさがこみあげて、笑顔でほつぺたがいたくなった。

もよちゃんの走らない理由は、ほかにもいろいろあつた。

「おばあちゃんに走つちゃダメっていわれてるから。」

とか

「歩いたほうがはやいから」

とか。

きのうは

「はやく走つてみんなにほめられたらはずかしい。」

なんていつた。とにかく、もよちゃん走りたい気持にならんないのだ。運動会だろうが授業だろうが、がんばらねばならんない。もよちゃんは、ねばねばしないのだ。

でも、ある日。わたしはもよちゃんが全力で走る姿を見つまつた。

女子トイレにおばけが出る、といううわさが広まつて、こわがりのもよちゃんがトイレから飛び出してきたのだ。休み時間に、もよちゃんが用を足しているときに、だれかが

「あー、おばけがいるー。」
と叫んだせいだ。

はじけたポップコーンみたいにトイレから飛び出してきたもよちゃんは、おどろくほど足がはやかつた。

「あいつ、はえーな。」

とクラスで一番足のはやい男子のはるたが、もよちゃんの後ろ姿を見送つた。

「もよちゃん、ろうかを走つちゃダメですよ。授業が始まるからもどつて来てください。」

ふじ木先生が叫んで追いかけた。でも、ふじ木先生はちよつとお年よりなので、なかなかもよちゃんに追いつけない。

「まのさん、もよちゃんを呼んで来てください。」

はあはあと息が苦しうなふじ木先生にたのまれて、わたしはもよちゃんを追いかけた。わたしはよく先生からたよられる。それに、たぶん女子で追いつけるのも私だけだろう。

でも、先生にたのまれたからじゃなく、わたししか止められないからじゃなく、もつと全力で走るもよちゃんを見てみたい。もよちゃんと思いきり走つてみたいという気持ちで止まらな

審査員コメント

そういう考え方もあるんだなと、「わたし」に気づきを与えてくれる、もよちゃんのこと、たいへんおもしろく読みました。ピンポンという音がひびくオンライン授業の場面からはじまつて、もよちゃんが、ごく具体的に描かれてるのが魅力です。

宮川 健郎

あべ はるこ

主婦 東京都

受賞のことば

学校から帰ったわが子の話、わかるなあと共感しながら私の中のかつての子どもが聞いています。でも大人になった今の私なら、その気もちも言葉にできそう、とそつと物語にすくいあげました。描きたいことが伝わるように書いてほつとしました。ありがとうございました。

